

はじめの一步！(文京区青少年育成プラン)

はじめの一步！

～「文の京」の子どもたちを健やかに育てるために～

2004年(平成16年)3月

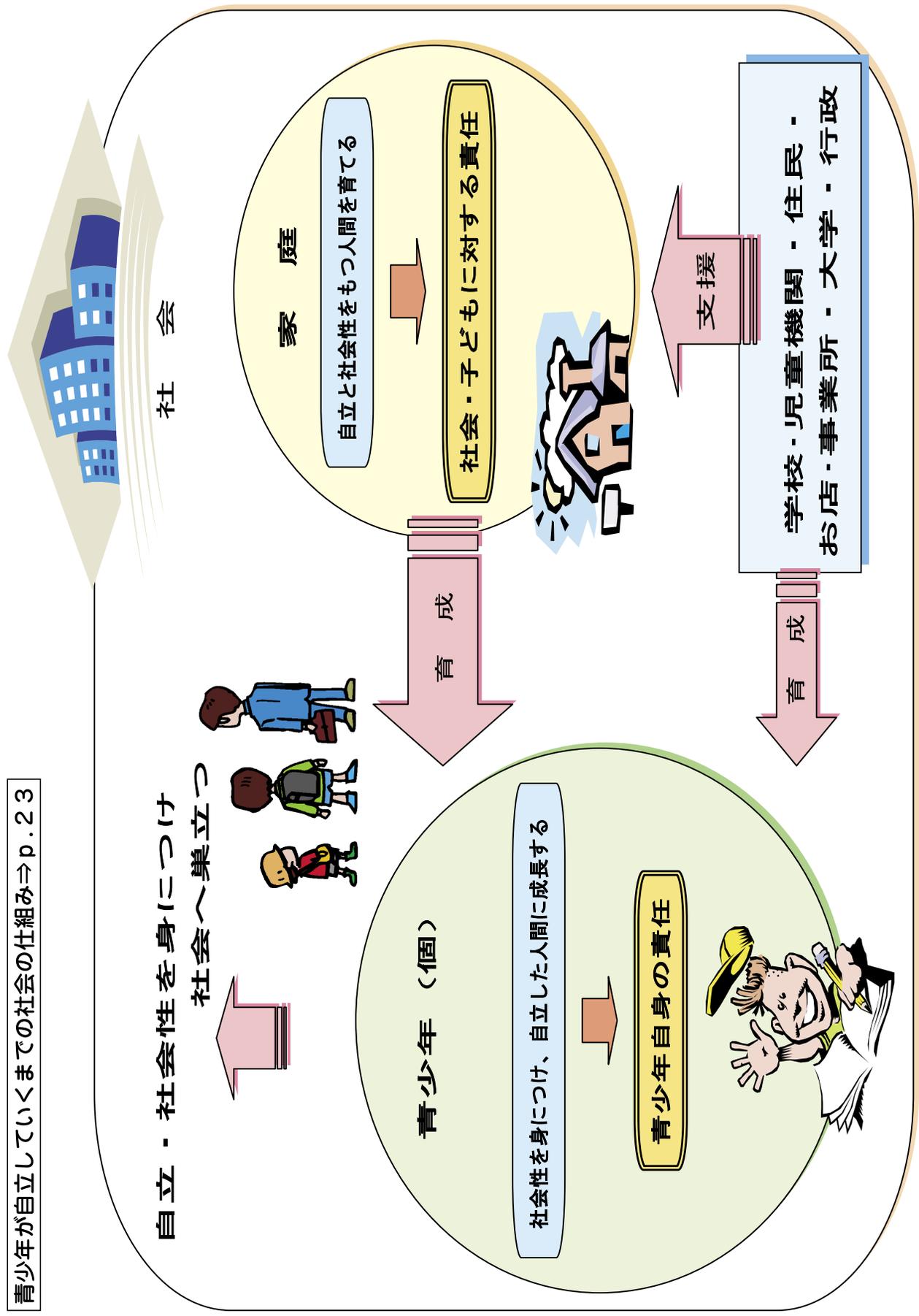
文京区青少年問題協議会

文京区青少年育成プラン

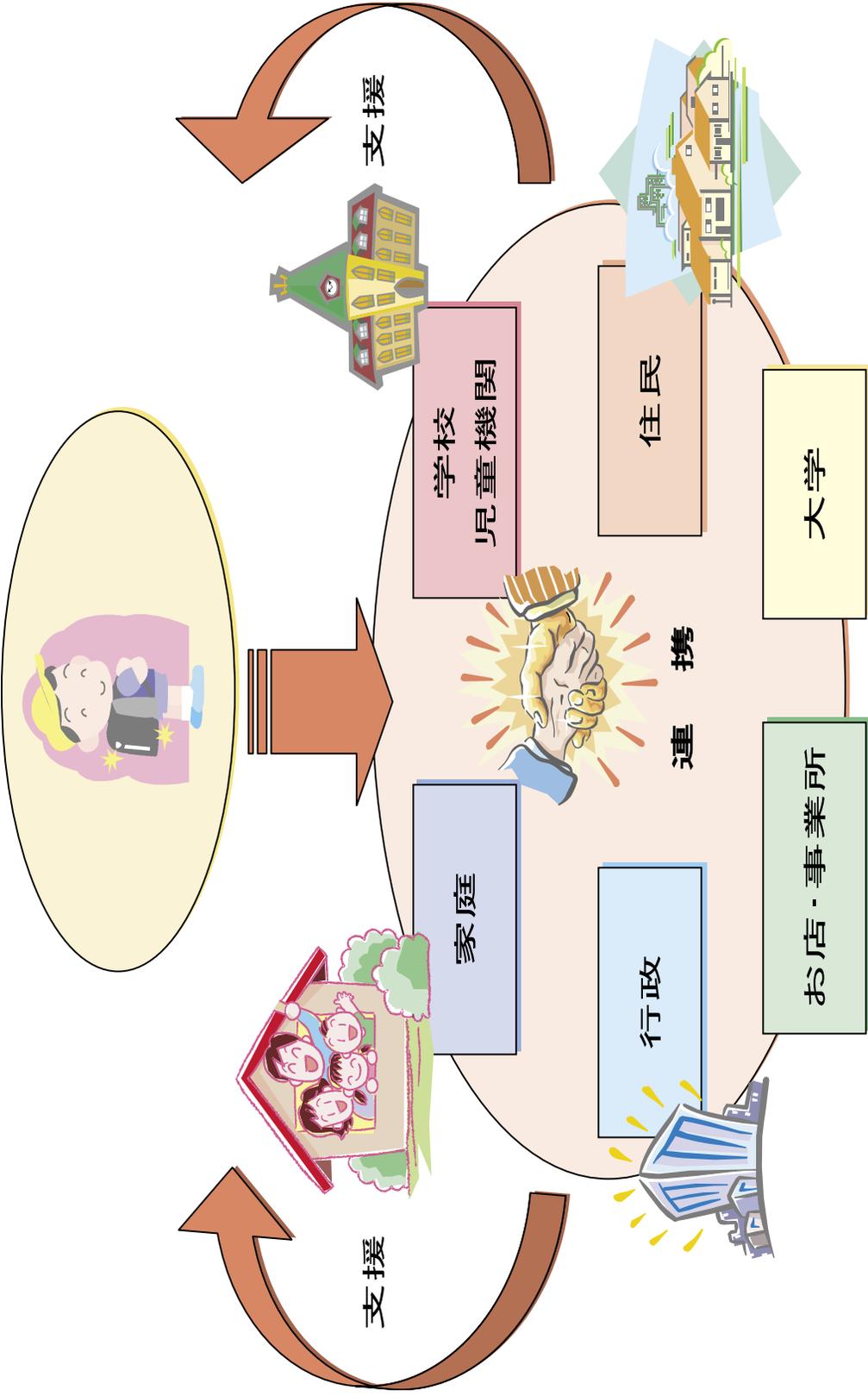
2004年(平成16年)3月

文京区青少年問題協議会

青少年が自立していくまでの社会の仕組み⇒p.23



青少年が社会性を身につけ、自立した人間に成長するために
守られるべき権利や欲求



はじめに



子どもたちが健やかに成長し、21世紀の日本を担っていく存在として成長していくことは、我々すべてのおとなの願いです。

しかしながら、青少年を取り巻く環境は、ある時は加害者となり、また、ある時は被害者となるなど、全国的に極めて憂慮すべき状況であると言わざるを得ません。青少年問題は古くて新しい問題といわれ、いつの時代にもあったことですが、常に社会的に重要な問題であります。文京区においては、刑法犯の発生件数や非行少年等が23区の中でも最も少ない現状ですが、子どもたちが置かれている状況を楽観視できるものではありません。

私は、「日本一の教育のまちを目指す」として様々な課題に取り組んでいるところですが、それは言うまでもなく、わが文京区の将来は青少年の双肩に掛かっているからであります。

そこで、文京区青少年問題協議会では、文京区における青少年の健全育成に関する計画を策定するにあたり、行政による行動計画に留まらず、青少年問題協議会を構成する関係団体を含めた計画の策定を目指しました。青少年問題への対応は行政や学校が対処すれば良いというものではなく、また、青少年の健全育成を推進する各種の団体と協働することで万全とは言えず、子どもたちを取り巻くすべてのおとなにも責務があります。

その考え方をまとめたものが本書であり、その基本的な考え方は、まずおとながその考え方、行動などを改めて見つめ直すことが青少年を健全に育成するための第一歩であるということです。本書の題名となっている「はじめの一步」は、正に青少年への投げかけであるとともに、すべてのおとなたちへのメッセージでもあります。

このプランを通じて、私も強く感じたことは、青少年の健全育成を推進する上においても、地域コミュニティーが極めて重要であり、地域や区民の皆さんとの協働においてこそ、青少年の健全育成は推進できるものであるということです。

明日の「文の京」の形成は青少年に掛かっているという意識を、すべての区民に持っていただき、このプランに基づいて一人ひとりの区民に行動していただくことを心から念願するものです。

このプランはここで終るものではなく、区民の皆さんの手により、さらに発展していくことを期待するとともに、この計画策定にご尽力いただいた区民の方々に深く感謝申し上げます。

平成16年3月

文京区青少年問題協議会
会長（文京区長）

煙山力

このプランを読む前に

みなさん！こんにちは。

私は、ふみのみやこと言います！私の住む「文の京」の青少年を代表して、このプランについて、少しお話をさせてくださいね。



まず、このプランを作ったのは、私たちのよく知っているオジサン、オバサン（お兄さん・お姉さん？）です。つまり、「文京区青少年問題協議会」という会議のメンバーから選ばれた、区民による区全体のためのプランなんです。青少年のために、文京区全体での取り組みを、区役所の人たちだけで作ったのではないプランって珍しいんだって。だから、忙しい人にも、サッと読めて、中身が伝わるように、なるべくわかりやすく作られているんだね！私も、おとなの人たちが私たちのために何を考えているのか、イラストだけでも見てみようかなあ。

しかも、このプランは、青少年をどうしよう、ということよりも、まず「おとなが変わらなければ！」というところから、書いてあります。おとなが変わるなら、私たち青少年だって変わらないわけにはいかないもんね。とりあえず、家に帰って両親に読ませなくちゃ！

それから、このプランには、「ひとりのおとな、ひとり子ども、また、子どものための事業を行う一団体として、どう行動していけば、青少年の未来が輝くのか…」ということが書いてあるんだって。このプランを読んで、できる人はどんどん、できない人もちょっとずつ行動していくこと。団体の人は団体として何ができるか、内容に沿ってそれぞれがみんなで考え、行動してほしいんです！「これは、誰々がやることだから、私はやらなくてもいい」なんて思っていたら、社会は変わらない。だから、目標に向かって、私も、友だちも、親も、先生も、子どもの世界と関係のなくなったおとなの人も、みーんなが少しずつ動いていけば、きっと少しずつ明るい社会になるんだってということなんだって！

さあ、ページをめくって見て！これを読み終わった人たちは、きっと何かが変わっているかもよ！？



目次

◇イメージ図

◇はじめに（文京区青少年問題協議会会長あいさつ）

◇このプランを読む前に

第Ⅰ章 おとなの意識改革

- 1 特集座談会「おとなの意識改革！」…………… 6
- 2 青少年の育成に取り組む ……その前に …… 13

第Ⅱ章 青少年の自立

- 1 「文の京」の青少年…………… 20
- 2 青少年の育成ビジョン 青少年の権利と責任 …… 23

第Ⅲ章 社会全体として

- 1 このプランの特徴 第Ⅰ章 第Ⅱ章との関連性 …… 27
- 2 重点行動 …… 28
- 3 推進目標と推進項目 …… 32
 - （1）推進目標…………… 34
 - （2）推進項目…………… 35
 - （3）具体的行動にあたっての意識…………… 51
- 4 行政のサポート …… 55

◇このプランの概要 …… 58

◇青少年の声！！ …… 61

◇このプランを読んでくださった方へ …… 67

資料編

- ・ 統計資料 …… 71
- ・ 児童の権利に関する条約（抜粋）…………… 78
- ・ 文京区青少年問題協議会条例 …… 81
- ・ 文京区青少年問題協議会要綱 …… 82
- ・ 文京区青少年問題協議会委員名簿 …… 84
- ・ 策定部会員名簿 …… 85
- ・ 策定部会開催記録 …… 86

付 録

推進項目に該当する事業一覧（平成15年度現在）

第1章 おとなの意識改革

1 特集座談会「おとなの意識改革！！」

ある日の会議室をのぞいて…



青少年をどうこう言う前に…
まず「おとな」でしょ！



隣のおじちゃん
(おじちゃん)

「最近、少年犯罪がニュースを賑わせて、物騒な世の中になってしまったね。」

文ちゃんママ
(ママ)

「子どもたちがおかしくなっちゃっているんでしょうか。」

京子の父さん
(父さん)

「いや、社会全体がおかしくなっていると思いますね。」

向かいのおばちゃん
(おばちゃん)

「でも、こんなに一生懸命、子どもたちを、社会を良くしようと考えている人もたくさんいるのに、何が足りないのかしら…。」



<家庭の地域への社会参加>

マ マ 「今、学校でも、じっと座ってられない子どもが多いみたいですね。」

父 さ ん 「学校の先生は、『家庭で躰ができていない』っておっしゃいますが、保護者

のほうでは、『学校でもきちんと注意してください』って…。」

マ マ「やっぱり、家庭に一番責任があるんじゃないかしら。」

おじちゃん「そうだね。確かに、家庭は子どもたちを育てるうえで基礎になるから、**やっぱり家庭が一番**だとは思うよ。でも核家族で、近所づきあいも少ないとなると、自分の子育てが正しいか、おかしいかなんて、気づかない場合もあるでしょ。」

おばちゃん「誰だって、悩みながらだけど、一応『自分はしっかり子育てしている』と思っているわよね。そうでないと、やっていられないもの。だから、『親が悪い』とか、ああしろこうしろって押し付けられると、正直うんざりしたりね。それでも、けっこう他の子の話を聞くと不安になったりして…。」

父 さ ん「だからこそ、他の人の話を聞いたり、イベントに参加してみたりすることで、得るものって大きいと思いますが…。」

マ マ「それが社会とのつながりですね。」

おじちゃん「そう。文京区は保護者の参加が多いほうだといわれるけれど、もっともっと、保育園や幼稚園、学校とか、子どもが出入りしているところに行くと、とにかく見て、子どもと一緒に参加してくれる保護者が増えるといいね。特にお父さんね！」



<あいさつはコミュニケーションの第一歩！>

マ マ「でも、今のお父さん、お母さん、どちらも、ほんと、近所づきあいや地域とのコミュニケーションが苦手ですよね…。」

父 さ ん「学校に行くと、子どもがあいさつしてくれるでしょ。すると、おとなのほうで困っちゃうんですね。『えっ？どうしよう』って。本当は、おとなのほうからあいさつしなければならぬのにね。」

おじちゃん「誰かからあいさつされたら自分もするけど、自分からはしないって人もいるんだよね…。どっちからあ

いさつしたって、いいのにねえ。」

マ マ「あいさつって、みんなですから気持ちいい
と思うんですけどね。」

おばちゃん「“ありがとう”という言葉も、言えない子が
増えていると感じていたのは、実際、おとな
のほうが“ありがとう”という言葉も、素直
に口にしていないからかもしれないですね。」

おじちゃん「むしろ、おとなに対して、『おとなが感謝し
ていますか？“ありがとう”って言ってますか？子どもにその姿をみせてい
ますか？』と言いたいね。」

マ マ「自然と“ありがとう”という言葉が出てくるおとなが周りにいれば、子ども
も素直に“ありがとう”という気持ちを表せる子どもに育つんじゃないかし
ら。」

父 さ ん「学校で、よく『あいさつをしよう』っていう目標をみかけるけれど、やっぱ
り子どもよりおとなに言いたいですね。あいさつするのに恥ずかしがっている
場合じゃないでしょ。」

おばちゃん「あいさつは、子どもとのコミュニケーションの第一歩。子どものあいさつの
見本となるように、街のあちこちであいさつが交わされるようになったら、
気持ちいいですね！」



<遊びの時間>

父 さ ん「子どもたちも最近は忙しくて、なかなか思い
っきり遊ぶ時間がとれないですね。」

おばちゃん「数十年前の子どもたちには、まだ時間的にも、
空地みたいな遊び場も、余裕がたくさんあっ
たけれど、今は、塾に行かなければならない
とか、居場所がないとか…。」

マ マ「おとなだって、必死に働いてるんだから、時
間もお金も余裕があるとは言えないですよ。
でもその中で、子どもと一緒に遊ばなくちゃ
って、みんな頑張っているのが現実ですよ
ね。」

おじちゃん「おとなたちは、子どもの遊びと言えば、屋外
で元気いっぱい走り回ることが一番だと考え



てしまうけれど、子どもたちにとっては、室内で絵本を読んだり、ぬり絵やテレビゲームだって遊びの一つ。室内遊びでも、家族やお友だちとのコミュニケーションって取れるんじゃないかな。」

父 さん「そうですね。でも、子どもたちと一緒に遊ぶには、おとなが“遊ぶ技術”を知らないで、子どもに相手にされませんよ。」

おばちゃん「忙しくても、そこがおとなの腕の見せ所かしら。」

おじちゃん「遊びは、人間性を培ううえで、とても大切なこと。少しの時間をいかに子どもにとってプラスの遊びの時間にしてあげられるか、とても大事なところだね。」



<おとなが変わらなきゃ！>

おじちゃん「極端かもしれないけど、自分のことや自分の家族のことしか考えないおとなも増えてるんじゃないかな。」

マ マ「子どもが小さいうちは、みなさん理解があります。でも、大きくなっちゃうと、途端に子どもの存在がわずらわしくなるみたいなんですよ。」

おばちゃん「でも、おもしろいことに、孫ができると、また理解あるおとなになるのね。そして、孫が成長しちゃうと…今度はひ孫が生まれるまで、また子どもはウルサイってね。」

おじちゃん「子どもが地域でのびのび遊んでいたら多少声が聞こえてあたりまえ。それなのに、すぐ近隣から苦情が出たり、通報されちゃったり…。」

父 さん「倒れてしまった自転車を子どもが一生懸命直しているのに、『早くしなさい！』って子どもを怒る親もいましたね。」

マ マ「そういうおとなの姿を見ながら育つ子どもに、期待ばかり大きくしても、それは無理というものですよね…。やっぱりおとなが、**おとな自身の生き方や日ごろの行動を見直していかないと**ならないんじゃないかしら。」

おばちゃん「だって、子どもはやっぱり親を見て育ちますからね。『口ばかりで、自分だってやって



ないじゃない!』なんて言われてしまいますよ。」

父 さん「親だけじゃないですよ。社会のおとな全員が子どもたちにしっかり影響を与えていることをわすれちゃいけないですよね。」

マ マ「おとなが変わらなきゃ、子どもは変わらないよってね。」

<規制を見直す>

おばちゃん「子どもたちには、のびのびと育て
ほしいですよね。」

おじちゃん「今の子どもたちは、何でもかんでも
規制、きまりって言われて、のびの
びとなんかできないんじゃないかな。」

マ マ「そうですね。もともと危険から子ども
を守るためだとか、それぞれ意味
があって禁止事項やきまりがあるん
でしょうけれど、もともとの意味は
忘れられて『きまりだから守りなさい』なんて、よく言ってしまう
よね。」

父 さん「子どもに好き放題やらせると、トラブルになったり面倒くさいことが起きる
から、その前に規制してしまうということもあると思いますよ。」

おばちゃん「子どもにいろんな経験をしてほしいと言っておきながら、それでは矛盾して
いるような気がしますね。」

おじちゃん「もう一度、規制の意味を子どもと一緒に考えてみる必要があるかもしれない
ね。」



<個性をのばす>

父 さん「子どもたちが頑張ったことに対して、親が相応の評価をしてないんじゃない
かと思うときがあるんですよ。」

おばちゃん「ついつい他の子と比較しちゃったり、運動や図画工作なんかよりテストを重
視してしまったりね…。それに、礼儀正しさやいい子になってほしいって、
強く思っているところもあるかもしれない。」

おじちゃん「たくさんほめてあげて、子どもたちにやる気や達成感を味わうことを教える

ことも大事なことだと思うけどね。」

マ マ「やっぱり自分が理解できる範囲におさまっている子って、親にとっては安心なんですね。本当は、その子その子によって、感じ方も違えば、表現方法も違うのよね。」

父 さ ん「ほかの子どもと違う個性でも、認めてあげるのは、やっぱり親の気持ちの余裕があるかどうか、かもしれないですね。」



<子どものあこがれのおとな>

おじちゃん「“子どもはおとなの背中を見て育つ”と言うけれど、本当にそうだね。だからこそ、子どもがあこがれるようなおとなでありたいね。」

マ マ「わかりやすいところでは、スポーツ選手や芸能人は、子どもたちの憧れよね。」

父 さ ん「そう。テレビを通してでも影響を受けやすいですから…。いい意味でも悪い意味でも、有名人は特に子どもに影響を与えることを意識して行動や発言してほしいですね。」

おばちゃん「身近なおとなで、あこがれの人ってありえない？」

おじちゃん「そうだね…。最近の子どもたちに、尊敬する人を聞いてみたら、親や先生と答える人がどのくらいいるんだろうか。」

マ マ「私たち親だって完璧な人間ではないけれど、頑張っている姿は、子どもに自然にみせられればいいですね。子どもたちに希望を与える素敵なおとなになりたいですよ。」



<忙しいおとなたちから子どもたちへ>

父 さん「こうやって、いろいろ会議して、知恵をしぼっても、事件は起きるし、問題が解決している実感はなかなかもてないですね。」

マ マ「ときどき、こんなこと言っても、無駄かなあって悩むときも、ないわけじゃないんですよ。」

おじちゃん「事実、おとな側に余裕がないんです。余裕をもって子どもと向き合うことがなかなかできない。でも、そうやってしまったら、何も変わらないんです。やっぱり、ひとりひとりが自分のペースで、少しずつでも行動するしかないと思うんですよ。」

おばちゃん「そんな中で、私たちおとなも、子どもたちのためだけでなく自分自身のためにもがんばるから、子どもたちにも精一杯輝いてね！って言いたいですね。」



2 青少年の育成に取り組む …その前に

次代を担う青少年をどのように支援していくか、このことを考えていくその前に、ちょっと立ち返って、私たちおとなが共通認識しなければならない点があるのではないのでしょうか。

おとなだって、やってないじゃん！

おとなの意識と考え方を見直す

青少年がいきいきと健やかに育っていくことは、いつの時代もおとなの願いであり、責任です。しかし、現在のおとな全員が、青少年にとって必ずしも人生の道標となる存在でないのは、残念ながら事実です。青少年は、家族にはじまり、先生や近隣の人など、多くのおとなに接しながら成長していきます。言うなれば、自分は青少年に関わっていないと思っているおとなの行動であっても、路上ですれ違うだけで青少年に影響を与えています。「子どもはおとなたちの社会を映す鏡である」とも言われ、おとなたちの言動・行動は、素直に子どもに反映されると言っても過言ではありません。

次代を担う青少年に期待をかける一方、私たちは「おとなが変わらなければ、子どもも変わらない」と考えています。

あんなおとなになりたいな！

①子どものあこがれ・モデルとなる、いきいきと輝く文の京のおとなたち



青少年からみて、おとながいきいきとしていない社会で成長していくことは、とても不安なことです。おとなが生きがいや、やりがいを見つけるのに苦労し、「自分が好き」と胸をはって言えない現代、子ども世代も「自分が好き」と言える子どもが少なく、「今さえ良ければ」と思いがちだと言います。次代を担っていく青少年が「おとなになりたくない」と言う気持ちをもってしまったとしたら、社会としてとても悲しむべき事態です。子どものあこがれは、スポーツ選手や芸能人ばかりではありません。身近にいるひとりひとりのおとなが、現実の社会で、幸せを実感しながら夢や目標に向かっていきいきと生きている姿を青少年に見せることが、将来の希望をもたせます。また、おとなが主体的に学校や地域と関わりを持つことによって、子どもも自信を持って社会へと巣立つことができるでしょう。青少年にとって、「あんな人になりたい」から、「さらに、あの人を越えていきたい」という前向きな姿勢の対象でありたいものです。

良いこと、悪いことって、なあに？

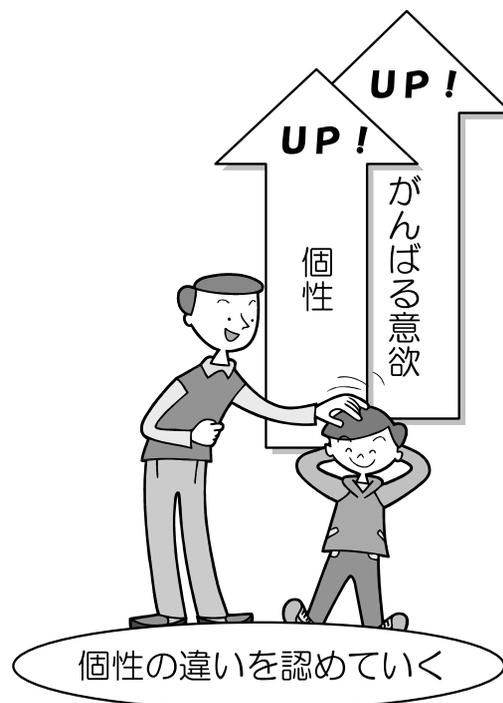
②日常生活における善悪の判断を、身をもって示す



社会において、子どもが正しい行動をしていても、おとなが慣れから社会性を無視してしまうことはありませんか。例えば、子どもが自転車を倒してしまい、直そうとしているのに、保護者が「何しているの！急いでいるんだから、そのままにして早く来なさい！」という光景を見れば、このままではこの子どもの善悪の基準がおかしくなってきます。日常生活において、おとなのペースで急ぎたい気持ちもある中で、良いことは良い、悪いことは悪いと、おとなとして身をもって示していかなければなりません。はっきりとおとなが示すことによって、青少年が正しい判断を確実に身につけていくことができると考えます。

もっとほめて！他人は他人 私は私！

③ほめる…個性をのばし、個性の違いを認めていく



保護者としては、どうしても我が子に「良い子」を求めてしまうところがあります。「しつけていないあの子の親が悪い」という他人からの評価を恐れるあまり、我が子をおとなたちが思い込んでいる「良い子」にすることを望んでしまうこともあるでしょう。個性をのばし、一人ひとりの個性の違いを認めていく。がんばったことに対しては、どんなことでもほめてあげることで、子どもたちのさらなる意欲をひきだすことにもつながります。親はもとより身近な存在の人に自分が認められ、ほめられることは、生きていくうえで大きな支えになると考えます。また、子どもは失敗して成長するものであることを忘れずに、失敗を乗り越えて成長する子どもの姿を認めてあげる必要があります。子どもにとって「失敗」すること、「再挑戦」することは、成長過程において重要な経験です。

甘やかすばかりで、どうして叱ってくれなかったんですか？

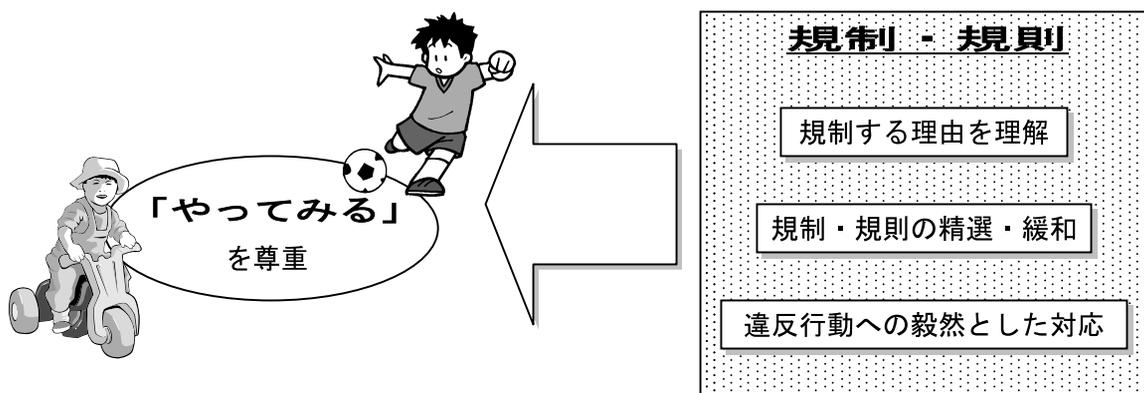
④ しかる…子どもとの信頼関係を築いたうえで



最近のおとなは、子どもに対して本気でしかることがほとんどないと言います。なだめ、すかして子どものご機嫌をとるようなしつけ環境を経て、一度も怒られたことがないまま成長した人が、社会に出てはじめて、上司に怒られ、お客様に怒られる。すると、対処する力がなく、落ち込みが激しかったり、恨みに思ったりしてしまうようです。親が子に対してしかるのは、ただ怒るのではなく、しつけの意味が含まれます。基本的な信頼関係ができていれば、子どもにもおとながしかる意味が伝わるはずです。愛と信頼関係をもって「しかる」ということも子どもの成長には欠かせません。

おとなって、「ダメ！ダメ！！ダメ!!!」って言うんだもん。

⑤規制・規則をみつめる

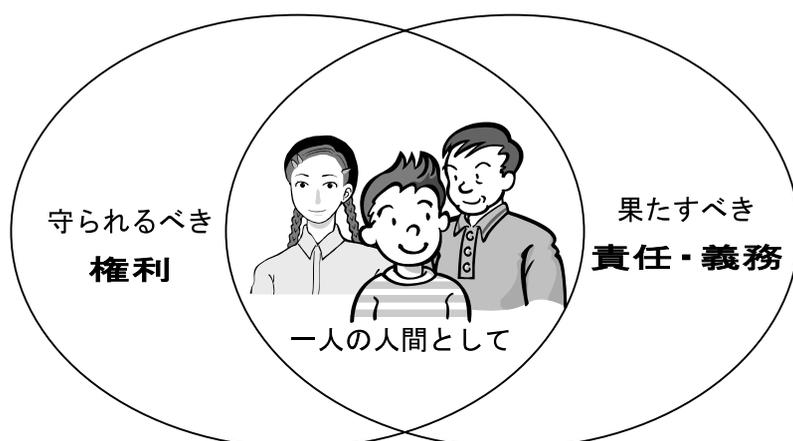


青少年には、さまざまな体験を通しのびのびと成長してほしいと願っています。一方で、おとなは子どもたちの危険や失敗を恐れ、規制をかけたり、規則をつくったりもします。生命に関わるような危険から青少年を守ることは当然のことですが、多少のトラブルに巻き込まれることで、それを解決する力もつくという考え方もあります。年長者が見守る中で、「やってみる」を尊重することは、意義あることではないでしょうか。

もちろん、規制や規則があるということは、その理由が必ずあるはずです。なぜ規制が必要なのか、おとなと青少年が一緒に考えてみることは、よい機会となるでしょう。意味を理解したうえで、青少年が自主的に規則を守ることができれば、理想的です。煩雑な規則の設定は子どもたちにとっても理解しづらく、規則・規制の精選も時には必要です。また、青少年の規則に反する行動に対しては、毅然としたおとなの対応を社会全体が示していく必要があります。

一緒に考えてください…

⑥子どもの権利を尊重し、また、子どもにもしっかり責任を果たさせる



子どもにも、ひとりの人間としての人権があり、虐待されたり、おとなに利用されたりすることがあってはなりません。また、教育を受ける権利や意見を言う権利なども尊重されています。日本では、まだこの子どもの権利の意識が完全に浸透しているとは言えず、「子どもの権利条約^(註)」を念頭に、おとなも子どもも理解を深めてほしいと考えます。おとなには、子どもに対する責任があることは当然のことですが、おとながルールを敷き、子どもを導いてあげることが大切なのではなく、子どもも対等なひとりの人間として、話を聞き、個を尊重する意識や態度が欠かせません。また、権利に対しては、必ず義務や責任が生じます。おとなの責任はもちろん、子ども自身にも権利を主張できると同時に、しっかり責任を果たさなければならないことを伝えていきたいものです。

(註) 子どもの権利条約（児童の権利に関する条約）について…児童の諸権利について明文化し、児童の人権を尊重及び確保する目的で、1989年に国連で全会一致で採択されました。日本は1990年に署名し、1994年に批准しています。この条約は、児童の生命に対する固有の権利、思想の自由、社会保障の権利、教育についての権利等を定め、これらの権利がいかなる差別もなしに尊重され、確保されるように適当な立法措置、行政措置、その他の措置を講ずることを内容としています。(⇒資料編 p.78 参照)